



文化ゆりかご

Vol.1

「文化ゆりかご vol.1」発行にあたって

はじめまして。「文化ゆりかご」発行者の宙空一派です。録音したり絵を描いたりするのが好きな学生です。自分の趣味嗜好や創作物、あるいは人となりを紙媒体上で示したいという欲求はずっと前からあり、この度ようやく行動に移しました。この「文化ゆりかご」を用いて色々と発信していきたいですが、その内容は私的で偏ったものになると思います。しばらくは自己完結的にやっていくつもりですが、いつか他人を巻き込んでみたいです。ともあれ気長に不定期で発行していきます。

記念すべき創刊号では、摩訶不思議な歌を演奏する東京のバンド「みみでかちゅう」を集めます。メインは2時間半のインタビューの書き起こしです。バンドの歴史やメンバーそれぞれのバンド観、製作中の音源についてじっくり伺います。その次に、筆者が(例の発表をうけて)個人的な想いと考えをつらつらと綴った文章、最後に活動歴やリリース作品に関するデータを載せています。楽しんでもらえたら嬉しいです。

インタビュー

音楽をどうしたいか、音楽でどうしたいか、色々な人がいると思う。装飾品にしたい人、生業にしたい人、系譜や歴史、文脈を感じたい人、剥き出しの感情にあやかりたい人、耳を塞がなければならない事情のある人、十人十色。そういう色々な人がいる中に「救われたい人」というのがいる。そういう人は、心の拠り所・精神のオアシス・完全な平和を欲して音楽を食る。

君は「みみでかちゅう」というバンドを知っているか。人それぞれ救いの何かがあると思うけど、僕にとってみみでかちゅうの音楽がまさしくそれ。胡散臭い言い方をすれば魂の救済、本当の本当に。みみでかちゅうのライブに行くというのは、子宮に帰るということ。ある種の場末の小市民にみみでかちゅうの音楽は沁みるはずなんだけど、思ったよりこのバンドは知られていない。

差し出された馬刺しのように無防備なギター、競歩に興じるタヌキのようなベース、まるで重たそうな物を重たそうに運ぶようなドラム。歌詞は、時に人を喰ったようで、時に人の嫌な部分をえぐって、時に教訓。平易な言葉しか使われていないのに。"人を傷つける方法を知っている"、"明日になったらいなかった"、"私はバカじゃない 良い人でもない"。"けっこう毛だらけ猫灰だらけ"といういたずらな呪文の反復は誰もの耳を赤子にする。曲の展開も不穏で意味がわからない、聴いていると心がざわめきだす。小気味良い違和感、出処のわからない所在無さ。時折聞こえてくる亡霊のようなコーラスも不安感を募らせる。聴けば

聴くほど謎が深まり、また聴く。いよいよ訳がわからない。全てがおぼろげなバランスで成立している稀有な音楽。摩訶不思議。柔和で邪悪。脳みそのしわから「？」と「！」が止まらない。みみでかちゅうは、西日が差し込む無人の子ども部屋の本棚の上に置かれた古びたブリキの騎士のようなバンド。初めて聴いたときにハートのド真ん中を射抜かれてからずっと矢が刺さりっぱなし（たぶん一生抜けない）。

メンバーはギター&ボーカルの川鍋智子、ベース&コーラスの高野恵理子、ドラム&コーラスの小倉真帆路。今は3人組ガールズバンドだけど川鍋さん曰く「チャットモンチーみたいにはなりたくない」そう。（実は）活動歴は長く、結成は2008年秋。川鍋「ギター歴はその辺のギターキッズより長い」。何度かメンバーの入れ替わりや活動停止の期間があって今に至るらしい。現在、新作"人生は時々晴れ"を制作中。

インタビューのきっかけは、8月18日に新宿モーションへ川鍋さんの弾き語りライブを観に行ったことでした。終演後、もっとみみでかちゅうのことを知りたいという個人的な理由でお願いしたところ、快諾して頂けました。話はとんとん拍子に進み、ちょうど一週間後の8月25日にインタビューをさせて貰うことになった訳です。

迎えた当日、場所は高田馬場駅前にあるビル9階のサイゼリヤ。先に到着したギター&ボーカルの川鍋智子さん（以下、川鍋）とドラム&コーラスの小倉真帆路さん（以下、小倉）、インタビュアーの宙空一派（以下、——）の3人、軽い挨拶の後にサラダを注文し、インタビューが始まります。※ベース&コーラスの高野恵理子さん（以下、高野）は後ほど登場します。

◇サラダ到着。川鍋、取り分ける。

——「結局、取り分け制に」

川鍋「いや、取り分けないと、なんか全然ねえ、あれじゃないですか」

小倉「川鍋さんの女子力について・・・」

川鍋「えー!？」

◇川鍋、サラダをこぼす。

小倉「あ、こぼしました!」

川鍋「動揺しました(笑)」

——「そういうこと言うから(笑)」

小倉「(笑)・・・記事にして頂いて」

川鍋「やだよー」

小倉「率先してやるわりにこぼすみたいなの」

——「(笑)」

川鍋「わーん、わーん。どうしようああ。本当さあ緊張してもちゃんと出来る人になりたいよ。これ自分のだから大丈夫。本当さあ緊張してもその場を、なんていうの、粗相しない人になりたい」

小倉「難しいよそれは、うん」



——「"みみでかちゅう"というバンド名はどうやって決めたんですか？」

川鍋「サークルのイベントに出させてもらうにあたって、名前が必要で、どうしようみたいな話になって、仮名は"髪切ったんだオーケストラ"だったんですけど、その後に微妙だなあって思って。始めのメンバーのベースが、まあその子とバンドをやろうと思い出したんですけど、高校時代の友達で、その子との高校のやりとりで、まあ交換日記をやってたんですけど、バンド名を一日一つ考えようみたいなことを交換日記でやっていた。それでその友達が各日の交換日記の出来事に、私になんか共通の知り合いのTシャツを見て、チェブラーシカ？チェブラーシカの存在を知らなくて私は。それなんか、"みみでかちゅう"っしょみたいな(笑)。中国とかなんかのミッキーパクツたみたいなノリで軽く冷やかしたら、『いやこれ、あの有名なチェブラーシカなんですけど』みたいな感じだったんですけど。その子的にすごいヒットして、めっちゃ爆笑になって。その帰りに友達が交換日記で、みみでかちゅうっていいねえってなって(笑)」

——「みみでかちゅうっていうのは存在するものなんですか？」

川鍋「チェブラーシカを私が言い当てたものですね(笑)。耳が大きかったから。っていう経緯で、みみでかちゅうというバンド名に。あんまり意味はないです。いやかなりないです」

——「早稲田のサークルに入る前ですか？高校の同級生ですよ。その人は早稲田に入ったんですか？」

川鍋「そうなんです。その子は大学で早稲田に入ったから、早稲田ってやっぱりサークルがいっぱいあるし豊かなんで、これならいけるかも、行っても大丈夫かもって気分になって。自分の大学のサークルにしようかその子と相談して、私の大学のサークルがあまりにもショボかったんで、いや絶対大竹(*1)の方のサークルがいいってなって」

——「大竹さん？」

川鍋「大竹っていうんですけど、前のベーシストが(笑)。いや大竹の大学の方が絶対いいってなって、じゃあ見に行こうみたいな感じで」

——「大竹さんは確か、"いわないよ"(*2)の詞を・・・」

川鍋「"いわないよ"とか"情緒不安定"(*3)とかの歌詞を書いています」

——「早稲田のサークルで活動されているのは、その人が早稲田に行ったからということですか」

川鍋「そうですね(笑)」



——「最初のメンバーから現在のメンバーになるまでの流れを教えてください」

川鍋「まず始めにやっぱり大竹と、始めはコピーバンドだったので」

——「どういったコピーを？」

川鍋「"銀杏 BOYZ"と"ELLEGARDEN"を、サークルの生活っていう1年生がやるイベントがあって、そこでやったのが始めですけどそこは放置して、そのあと、ドラムに女の子がいたんですけど、辞めちゃったんですけど滝口さん(*4)という女の子と大竹めぐみさんとやって、そのあと滝口さんがサークル自体を辞めるとかそういうことになって。けどサークルとの繋がりが強かったんで、サークルの2年生のD発(で一はつ)に出なきゃ、出たい、で誰か叩いてくれないかっていって、塩谷さん(*5)っていうサークルで"全種類"とか他のバンドやってた彼女に頼んで。で、そのD発に出る前に大竹さんが辞めちゃったのでどうしようと思って。でなんか西原さん(*6)っていう男の人が元々、友達の本バンドのベースを弾くぐらいの意識で弾いてくれて。その後、たくさん・ドラムの子(掛け持ちの)バンド数が多かったんで、でなんかあんまり良い意識を持っていないとかなんか、けっこう、共通の友達にあんまり、んー、あんまり(みみでかちゅうを)やりたがっていないみたいな話を聞いたので、じゃあこの人とやってるの違うかなあって思って。で、たまたまその時に新入生がけっこう入る時期だったんですけど。で、夏(笑)、サークルばっかりのことなんですけど、夏合(なつがつ)っていうのがあって、夏合宿にそのドラムの女の子は来ないし、そもそもあんまりやりたくないみたいな感じだったので、夏合宿にやってくれるドラムを探そうと思って。で、1年生の池田佳奈美ちゃん(*7)っていう子を誘ってみて。けっこうそこから長く、西原さんと池田佳奈美ちゃんできっこう長くやってきて。けどそのあとに、池田佳奈美ちゃんがまあ『バンドを辞めたい』『え〜〜』ってことになってバンドを辞めて。それでまたサークルの女の子、またサークルですね(笑)」

——「基本的にメンバーは早稲田のサークルの人が多いいんですか？」

川鍋「そうだと思います」

小倉「それ以外はいないんじゃない？」

川鍋「いないですね。なんと！」

——「じゃあリーダーだけ学外から・・・ああ、でも、メンバーの大学はいろいろですか？」

川鍋「いやえっと、さっきまで言ってきた人はみんな早稲田出身の方々で、そのあとのドラムの杉浦さん(*8)っていう、今"Fat Fox Fanclub"とか叩いてるんですけど、その子になって、その子は早稲田じゃなくて学習院、けどやっぱりインカレで入ってきて。その子を捕まえてやって、けどやっぱりうまくいなくて。ちょっと活動が停止して、まあ自分の中でもまあいろいろとわーってあって。もう一回やり直そう、やり直そうというかもう一回活動しようってなったときに、何ていうか、そうですね。杉浦さんが辞めたのが結構、結構いいやめ方じゃなかったんで、そういう・・・」

——「いいやめ方ではなかった？」

川鍋「まあ仲良くできなかつたというか。まあ本当にだから、仲良くできるというか。うー

ん(笑)、そうですね・・・」

——「嫌なこと聞きますけど、みみでかちゅうはメンバーの出入りが激しいじゃないですか」

川鍋「激しいです」

——「それはなんでですか？(笑)」

川鍋「うーん。始めの女の子は普通にバンドを辞めるみたいな、音楽を忙しいしやれないみたいな感じで辞めていって。その次の塩谷さんは、うーん、そういう理由じゃなかったですけど、なんかちょっとやる、あんまり乗り気じゃなかった。でその次の佳奈美ちゃんは、やっぱりバンドを辞めよう、音楽を辞めるという選択をして。杉浦さんは本当に、うまく別れられず(笑)、なんか喧嘩みたいな感じになってしまったんですけど。それで、今の小倉さんになって」

——「小倉さんが加入したのはいつ頃ですか？」

小倉「去年の春？」

川鍋「そうですね」

——「川鍋さんが誘ったんですか？」

川鍋「私が誘いました。なんか前に、(小倉さんが) ベースを一瞬コピーしたことがあって、その時に何でも出来るんだなと思って(笑)。多分やれば何でも出来る」

小倉「浅く広くやってみたい人なん・・・」

川鍋「だなんて思ったのと、まあ本当に私の仲良い友人の一人でもあって、とても信頼をしていたので(笑)。なんかもっとバンドでやればもっと会う機会増えるんじゃない？みたいな、そんな(笑)。なんか別に遊ぼうっていう連絡をしなくても会えるバンドって良いじゃないですか。やっぱそういうのが、もうちょっと(笑)。どうせ会うんだったら会いたい人とやりたいじゃないですか。っていう感じですかね」

——「そういうメンバーの選び方をしたのは何か理由があるんですか？」

川鍋「うーん。なんかその、佳奈美ちゃんと西原さんのときも、辞めて、杉浦さんになったときになんか結構、なんていうんだろうな、うーん、まあちょっと懲りました」

——「懲りたというのは人間関係的な意味ですか？」

川鍋「まあそうですね、そういうのもあるし、あとプレイヤー目線ですごい杉浦が好きだったんですけど、ドラムの音とか。そういう目線で選べば？って周りから結構言われて、それでそこだけを見て、杉浦を誘った面があって。やっぱそれだけじゃないよなあっていうのを実感した時だったので」

◇ベース&コーラスの高野が到着

高野「こんにちわ」

——「どうも、こんにちわ。いまちょうどもう勝手に始めてましたが・・・。じゃあ一旦仕切り直していいですか」

川鍋「どうぞ(笑)」

高野「宜しくお願いします」

——「いまちょうどバンドの歴史について聞いていて、まあオリジナルメンバーが川鍋さんだけなので、いま川鍋さんが一人で喋ってる感じですけど(笑)、これからいろんな話を他のメンバーに・・・」

川鍋「ホント、急いで喋ると何もうまく言えないので、お願いします」

——「高野さんはいつごろ入られましたか？」

高野「2011年の3月、4月くらい。元々キーボードをやって欲しいって言われたんですけど。でその一、4人でしばらく、1年弱くらい活動していて、そこでベースを弾いていた西原さんが辞めることになり、ドラムの杉浦が『ベース弾いてみれば？』っていうことを言っていたんで、自分も西原さんのベースラインがかっこいいと思っていて、好きだったんでやってみたくて、ベースを弾き始めました」

——「今までベースの経験はなく、始めたということですか？」

高野「そうですね」

——「西原さんっていうのは『(ベースが)重たいので辞めます』って言った人ですか？」

高野「はは(笑)」

川鍋「『ベース、だって重いもん』って言って辞めた人です」



——「練習とかはどうやってやっているんですか？」

川鍋「練習は本当に、そうですね、あんまり上手くないので、練習をしなければ。曲を作って、どう練習・・・」

——「曲作りはどうやっていますか？」

川鍋「曲作り。は、始めの頃は全部私がギター構成も考えてきちゃって、で、合わせてもらうって感じだったんですけど、最近は結構まあ、ぼわっとして勢いで曲の軸だけ、軸っていうかまあ弾き語りとかは普通にメロディとかも考えてくるんですけど。ここで、この間奏でどうしようとかは結構、以前よりもメンバーに頼って、頼ることができていて。で、コードとかも結構、コードに関しては自分も本当にあんまりなので、すごいそういうところの比重はこっち(メンバー)の方が高くて(笑)。そういう構成とか、構成というか、ここでどういう・・・何か本当に、ぶおって生み出すことは生み出しといて、まあ良く言えばアレンジを(メンバーに)して頂けると思うんですけど」

——「じゃあ全部きちっと各パートのフレーズとかまで川鍋さんが決めてるっていう訳ではないんですね」

川鍋「もう全部、彼女たちが考えて下さってます、だいたい。素晴らしく。まあそれが良いのか悪いのかって言うのとどちらかって言うのと良くないと思うんですけど。けどそれで、そう

ですね、自分もあまり良い、なんていうかプレイヤーとしての本当に何かが無いので、はい」
——「小倉さんはドラムをどうやって考えていますか？」

小倉「えー、ちむ(*9)が『今日は新曲作る』『こんな感じだから』って一回聴くんですけど、それを聴いて、何となく合わせていって(笑)」

高野「(笑)」

小倉「高野もそれに合わせて弾くんですけど、なるべくベースに合わせてよとか、色々どんどん調節しながらやってます」

——「そういうリズム隊の連携があるんですか」

小倉「最近意識しました(笑)」

川鍋「うーん、ありがたい」

高野「(笑)。何も決めないでほぼ毎回、感覚でやってるんで(笑)、なんか誰も理論の人がいないから」

川鍋「確かに(笑)」

小倉「雰囲気」

高野「雰囲気で(笑)」

——「前のベースの西原さんはめちゃめちゃ上手い人ですよ」

小倉「うん」

川鍋「あの人は、上手い人だよ(笑)」

——「あの人がいた頃は、何とというか、ベースがめちゃめちゃ上手かった印象があつて。今は何とというか、失礼な言い方ですけど誰かが突出して上手いという訳ではないと思うんですけど、妖精みたいな感じがするんですよ」

高野「(笑)」

小倉「(笑)」

川鍋「妖精。」

——「演奏、バンドで妖精、というか。摩訶不思議な魅力が生まれているような気がするんですよ」

川鍋「妖精。」

——「どうですか？ガールズバンド・・・3人女っていうのは」

川鍋「どうですか？」

小倉「どうですか？ 私はガールズバンドしかやったことがないので、普通です」

高野「(笑)」

川鍋「普通ですか(笑)」

小倉「ふわふわした感じがします、ここは」

——「そのふわふわという言葉にいろいろ含まれてる感じがします。言い得て妙ですね」

小倉「そうですね」

高野「うーん。喧嘩するとめんどくさいですね(笑)、それくらい。でも何か、こわくないっ

ていうか、リラックスして出来てるのはすごい良いです」

——「その話もしようと思ったんですが・・・以前、川鍋さんの弾き語りのライブでお会いしたときにバンドでいろいろあったみたいなことをおっしゃっていて、まあ人がバンドって、こうやっているのだからそういうトラブルは付き物だと思うんですけど、どういったトラブルだったんですか？」

高野「(笑)」

小倉「(笑)」

——「言えなかったらこの質問やめますし、次に行くんですけど・・・」

川鍋「どういったトラブル・・・」

——「じゃあ次の質問に行きましょうか」

小倉「(笑)」

川鍋「(笑)」

——「人間的なことですか？」

川鍋「うーん、なんか、すごい、あの一、何ていうのかなちょっとした、何かバーンみたいな、不満がたぶん日々、ちょっとちょっとあって。けど言うタイミングがないっていうか、けどいま言ったら良くないっていうか何か今けど言うのもっていうときと、多分みんな3人とも溜めてて、それを言う機会でもあったと思うので、あんまりいま考えるとあんまり悪くなかったかなって(笑)思うんですけど、『あっこんなこと考えてたんだごめん』みたいなことがいろいろ気付けたので」

——「お互いに言い、言ったんですか？」

川鍋「そうですね。なかなか、こう、『言えよ』って言って言えるものじゃないと思うので。そういうのを聞いたのが逆にいま考えれば、良かったですね」

——「いま関係は良好なんですか？(笑)」

小倉「うん」

川鍋「えっ、良好だよ(笑)」

高野「たぶん(笑)」

小倉「(笑)たぶん、はい。そわそわした感じ」

川鍋「そわそわ」

高野「仲良いんじゃないんですか」

小倉「仲良いんじゃないんですか(笑)」

川鍋「えー！そわそわそわ」



——「みみでかちゅうは周りの知り合いやらサークル仲間やらバンドの人からどういう風に思われていますか？」

小倉「変だって思われる」

川鍋「そうですね。変だ・・・」

高野「・・・変と思われてるんじゃないんですか(笑)」

川鍋「変と下手、とは言われてて、あと、うーん、けどまあ、何ていうのかな(笑)、そうですね・・・」

高野「曲が良いって言われます」

川鍋「そうですね、曲が良いとかメロディが良いとか歌詞が良いとかそういうのは、言ってもらえたりします」

——「何と言うのか、シーンのようなものに属してるような印象はありますか？」

川鍋「ないですね、ここは本当に」

小倉「うーん」

——「じゃあ、仲良いバンドとか」

川鍋「仲良いバンドもなんかやたら、やたら、仲良いバンドか。そうですね、全然売れてる"トリプルファイヤー"とか"うみので"とか何かそういう。最近解散したけど、企画にも出てくれた"サカシマ"とか」

高野「ああ解散したんですか？」

小倉「そうなんだ、えー」

川鍋「そんな感じですかね。やっぱり、なんか自分から開拓した訳じゃなくて、周りのサークルの人達もよく対バンしてるから、自然と仲良くなったみたいな人達としか、あんまり仲良くないですね」

——「ああ、ライブをするってなった時に、それは呼ばれたから出るっていう感じですか？」

川鍋「うーん、なんかこのタイミングで、ってかやないとちょっと何ていうのかな悪くないみたいな感じで最近はやってるんですけど。そうですね、呼ばれたから出るっていうのよりも、うーん。呼ばれたから出るっていう身分でもあんまりなくて、やりたいからやるみたいな感じだけど、まあ呼ばれたから出るって感じにまでいきたいですね」

——「あーいや、何と言うか。もっとちやほやされて良いと思ってる、個人的には」

川鍋「されません。されませんね」

——「それは、僕は、周りの人があんまりヤバさに気付いてない(笑)というか僕は本当にメチャメチャ凄いなと思ってて、このバンドは。でもそれを凄いなと思う、その、何と言うか変な言い方ですけど、凄いなと思える感性を持ってない人が周りに多いだけな気がするんですよ、勝手に」

川鍋「うーん」

高野「うーん」

——「前に個人的に話したときだと思うんですけど、『技術が無いと聞く耳を持ってくれない』みたいなことを言ってませんでした？」

川鍋「言ってますね、言っていました」

——「そういう傾向が強い界限と、そんなに気にしない界限があるとしたら、気にしない界限からもっとウケる、ウケるといふか、その、評判良いと思うんですよ」

川鍋「確かに。周りが気にしすぎる界限なので、どうしてもそういう評価を受けてくるので。気にしない界限の開拓の仕方もよくわかってなくて。でもあまりに自分もあんまり多分好きじゃないし、気にしない界限の音楽が。で、どうやってどこに行けばそれを開拓されるのかっていうのもあんまりわかってないけど。まあ本当に周りの環境が気にする界限っていうのあって、どうしてもこのことは毎回言われるので。まあ流石に染み付いたといふか。あんまり、そうですね、うーん」

——「あんまり気にしない界限が好きじゃないんだとしたら本当はもっと川鍋さんが上手くなってないとおかしいですよ、嫌だから」

川鍋「それめっちゃ言われます(笑)」

——「それがこのバンドの、というより川鍋さんなのかな、特殊なところだと思うんですよ」

川鍋「うーん」

——「何で上手くなんないんですか(笑)」

川鍋「多分なにかを上手くなったことがないんですよ、わたし。なんか、めちゃくちゃ上手くなったことがなくて、上手くなり方がわかんないんじゃないんですかね、って思いますね」

——「他人・・・といふかまあ、バンドメンバーから見てどうですか？」

高野「うーん、上手くならないことについてですか？」

——「はい、といふか川鍋さんはどういう人ですか？」

高野「うーんなんか理想が高くて、なんか、何だろう、理想と現実のギャップがある。といふか、なんか自分の良さじゃないところを生かしたがる、と私は前からちむさんに言ってるんですけど。なんか、もっと自分の良いところをどんどん伸ばしてみんなにアピールしていけば良いなと思って。その、なんか(笑)さっきの話とも関連あるんですけど。なんかアピールの仕方とか、どの方面に見せていきたいとか、そういうのが身に付いたら、すごい良いんじゃないかなと思います」

——「さっき気にする界限・気にしない界限みたいな話をしましたが、バンドを外から見たときに高野さんはどう思いますか？」

高野「うーん私は、上手さで売るようなバンドではないし、もっと雰囲気を押していきたい。なんか最初聴いたときは"たま"みたいな感じかなあと思って。"たま"はまあ上手いですけど(笑)。まあそういうなんか、あの一、良い雰囲気を持ってるといふのもっと出していいんじゃないかなあ」と

——「なるほど。じゃあ小倉さんはどうですか。バンドの売り出し方・・・売り出したいか売り出したくないかはさておき」

小倉「最初呼ばれたときは、売れるとか関係なくて、ただバンドが楽しくなれば良いって理由で呼ばれて、あんまり売りたいとか考えなかったんですけど、うーん。でも私、昔から聴いてて、サークルの同期だし、すごい好きで、やるからにはでもやっぱり売りたいって

思って。うーん、でもさっき高野が言ったみたいに、ちむが考えてやってることと実際できていることが全然違うので、どこを目指していくのかで意見が合わないことが・・・、まあそういうのもあって話し合ったんですけど。で、ライブ場所もハコを違うところにしようというのも考えて、でもそこでも意見が合わなくて結局、何か高円寺とかそこらへんも出てみようみたいな話になったんですけど、その話はその後結局実現してないし」

川鍋「確かにそういう話も・・・」

小倉「考えてみたんですけど行動に移せてなくて、段々うやむやになって私もどうすればいいかわからないです」

——「うーん、川鍋さんはバンドの最終目標というか、どうなりたいとかありますか？続けたいでも売りたいでも何でも良いですけど」

川鍋「続けたいですね。続けたいし、聴く人を増やしたいっていうのはありますし、そのための努力の方法も確かに考えなきゃいけないって、ただ考えるまでの、なんて言うんだろう。けっこう自分が、何て言うのかな、そういうことをやるまでに、自分のキャパがないので。誰かがそう導いてくれたら行くと思うんだけど」

——「でもさっきのメンバーの提案は導きに近いんじゃないですか？」

川鍋「そうだけど、もう本当に、ああ・・・そうですね、導きに近いですね。ただそのライブハウスを応募しよう応募しようって思って、けど曲作って忘れちゃうみたいな(笑)。そうですね、導いてもらってるんですけどね何回も。導いてもらって、しっかり、良さを伸ばせるところにしようってなって。でも、うーん、何か他のことをやっちゃって、そこまで手が伸びない」

——「うーん、慣れてるところから違うところに行くっていうことは体力のいることですか、川鍋さんにとって」

川鍋「すごい体力がいるし、何か意外と開拓者になれなくて。やったことがないところに、誰もやったことがないっていうか。まあ本当に、身近にそういうのをあんまり見てきてないので、すごくエネルギーが要って、別になんかやりたくないとかそうじゃないんですけど、そこまでの手が伸びなくて、というか。例えば今はレコーディングやってて、レコーディングで良いやつ作んなきゃなっていうのを考えてると、もうそこまで手が伸びないっていうのが一番の問題だったんだなって話してて気付きました」

——「それはその、また戻しますけど、こないだあったゴタゴタでもその話はあったんですか？」

川鍋「その話・・・」

高野「ああその、私と小倉さんが何か言って、それをあんまり聞き入れてくれないっていうことが今までよくあって、でそのことも、その、何かいろいろ不満が溜まったときに言って、でまあこれ、うん。まあ、前のことなんで」

小倉「(笑)」

——「川鍋さんの中に何か譲れない何かがあるんですかね」

川鍋「いや意外とないと思うんですけどね」

小倉「あるよーー」

——「(笑)。分かれてますよ意見が」

川鍋「なんていうか、うーん。じゃあこれはちょっと反省します・・・」



——「ライブでみみでかちゅうのメンバーが、誰一人楽しそうに演奏してる人がいないんですけど、演奏中は何を考えていますか？」

小倉「(笑)。真っ白になってるので、緊張して真っ白になるので、頑張ってる感じがとめて次どうしようかっていうことばかり考えてます。そうすると顔が強ばります」

高野「私は何も考えてなくて、ちむさんが歌ったり演奏してるのを観察してます(笑)」

小倉「(笑)」

川鍋「(笑)」

——「川鍋さんは」

川鍋「けっこうこの曲を作った当時の自分を思い出しながら歌ってます」

——「曲は当時の日記みたいな感じですか？」

川鍋「そうですね、当時の日記というか、当時何か思い立って作るの。作った頃の・・・けっこう、その人に作ったみたいな曲が多いので、それを思い出しながら」

——「人に、手紙みたいな」

川鍋「手紙って訳じゃないんですけど、なんかこの人に伝えたい・・・伝えたいって訳でもなくて。だいたいなんか思って、なんか言葉をバーンってきて、その自分なりの・・・返し？、の一言を言うために、周りいろいろ付け加えてやるみたいなことをやったなあって、思い出しながらやってますね」

——「例えば、"お月さんとうさぎさん"(*10)はすごい童謡っぽいんですけど、あれは実体験ではないじゃないですか、あれはどういう風な気持ちで作ってるんですか？」

川鍋「あれは、なんか。言いたいことが、始めのやりとりがお父さんとやったことで。なんか逃げ道の見えない発言を当時してて、何ていうか、すごい人を追い詰めちゃう発言？正しいかもしれないけど、正論言うのだけじゃないっていうか、相手に絶対逃げ道を用意しなきゃダメなんだよってお父さんに言われて、人と話すうえで。それがマジその通りだと思って、それを歌にした・・・そうですね」



みみでかちゅう。右から、川鍋、小倉、高野。2014年9月24日、渋谷7th FLOORにて。



——「ライブと録音物の違いは何だと思えますか？」

小倉「なんでしょうね」

川鍋「一枚目を作ったときに、一枚目と言っても全く世にあんまり出てないんですけど・・・」

——「"ひとりあそび"(*11)」

川鍋「ひとりあそびを作ったときは、それこそそのまま自分で演奏・・・なんかバンドのその、できることだけやろうみたいな感じで、取りあえずレコーディングも初めてだったし。で、いま作るってことになって、なんかライブと別物にすべきかなあって思ったのと、あとなんか自分のギターが、ホント練習しろよって感じなんですけど好きじゃなさ過ぎて、うーん、なんかもっとギターが好きな人に自分の曲を弾いてもらったらどんなに良いだろうって思ってる」

高野「私はあんまり変えなくて良いかなあって思ってるタイプで、その、ライブというか、録音するものの雰囲気が入っていれば、良いかなあと思って。あでも、音を足すことは別に悪いことじゃない。けど、そんなに、録音だからこうしなきゃって言うのは私はあんまりな

いですね」

小倉「うーん・・・。ライブの方が雰囲気が伝わると思うんですけど・・・」

——「(笑)。録音物の考え方も意見が分かりますねえ」

小倉「録音物は、みみでかちゅうの音楽をクリアな音で、すごいはっきり聞こえるのもいいんですけど、あんまり雰囲気伝わんないんじゃないかって思うんですけど、でも何か形に遺したくてやっています」



——「音楽を始めるきっかけとか音楽との出会いについて教えてください」

高野「中学生のときにバンブがめちゃくちゃ好きで、高校生になったらバンドをやりたいって思って、それで軽音部に入りました。"チャットモンチー"とか"椎名林檎"とかをやって。全員女の子で"NUMBER GIRL"とかやって、なんかあんまり、やりづらかったんですけど(笑)。まあテキトーに高校生が好きそうなやつを普通にやってみました」

——「それが初めての演奏の体験ですか？」

高野「あーでも、ちっちゃい時はピアノを弾いてて、私ピアノもすごい下手なんですけど、その、発表会のときに、『間違えても間違えた感出さない方が良いよ』って先生に言われて、今でも下手なのでそれは活かしてますね。良いアドバイスと思って(笑)」

——「小倉さんはどうですか？」

小倉「うーん、私も昔ピアノをやってて、まあその演奏とか好きで、中学生の時から椎名林檎がすごい好きで。それが高校になって、すごい洋楽が好きなギターを弾く女の子と友達になって、その子に誘われて、高校からガールズバンド組んで。コピーバンドだったんで、椎名林檎とか、椎名林檎以外はあんまり好きじゃないバンドのコピーを(笑)やってて、**ELLEGARDEN**とか」

高野「へえ、歌ってたんですか？」

小倉「歌ってた」

川鍋「えー、カッコいい。聞きたい」

小倉「ちょっとあんまり思い出したくないんですけど。で、もう歌いたくないって思って、大学入ってベース買って、サークルに行ったんですけど、ベースの枠があんまりなくて(笑)。歌で誘われるようになって、歌ったりちょっとキーボード弾いたりしてました。で、ここ(みみでかちゅう)で初めてドラム叩いたりしていろいろやって、楽しいです」

——「なるほど。じゃあ川鍋さんは」

川鍋「私は、その、うーんと、バンドとの出会いはやっぱり"**BUMP OF CHICKEN**"だったんですけど(笑)。中学の時にわりと、中3のときにメッチャいじめられて、助けてくれた女の子が **BUMP OF CHICKEN** を貸してくれて、いやホント **BUMP OF CHICKEN** に助けられ、私も人を救いたっていうそんな理由からバンドをやりたいって思ったんですけど。

でも高校に行ったら軽音楽部がけっこう怖かったので入れず・・・」

——「人がですか？」

川鍋「人とか雰囲気とか。なんかイケてる人しか入れない感じがして。それで、まあ沸々と。けど、バンドとか聴くのは楽しくて、でまあバンドをそれなりに聴いてて。高2のときに大竹さんに会って、大竹さんに **BUMP OF CHICKEN** 薦めたら大竹さんも気に入ってくれて、それでもやっぱりバンドをやる・・・何て言うんだろう、やりたいけどやれなくて。けど、ある日2人で歩いてたら、『私ベース買ってバンドやろうと思ってる、大学に行って』って言われて、その一言で私はやろうって思いました。その一言が無かったら今でもバンドはやってないです。」



——「いま尊敬してるとか影響を受けたミュージシャンっていますか？」

高野「影響は受けてないですけど、"mum"。アイスランドの **mum** ってバンドがすごく好きで、それで・・・すごく聴いてました(笑)」

——「単純によく聴くでも。小倉さんは」

小倉「大学に入って友達に"**Yeah Yeah Yeahs**"を覚えてもらって。ちょっとパンクっぽかったり・・・3枚アルバムを出してるんですけど、あ4枚出してるんですけど全部雰囲気違うんで一概に言えないんですけど。すごい好きで、カレンOっていう女性のボーカルがバンド以外にもいろんな活動をしてて、カレンOにちょっと影響されたところがあります」

——「それは現在進行形ですか？」

小倉「うーん、はい。憧れ・・・かつこいいな」

——「川鍋さんは」

川鍋「最近よく聴くのってなんだろうって結構思い付かないんですけど、なんか意外とこの年になっても、何だかんだその(笑)、結局ロキノンが好きなので。最近はすごい"**フジファブリック**"とか。なんかそのけっこう自分の中で、フジファブリックの志村さんが亡くなったことが大きすぎて、なんかふと思い返すと聴きます」

——「毛だらけは、情緒不安定ナイト(*12)の時に、"サーファーキング"を聴いて作ったって言ってましたね」

川鍋「そうですね。毛だらけで言いたかったのは・・・けっこう大竹に対して言った曲で。大竹がなんかめちゃくちゃ自分が・・・なんか共通の知り合いがいて、すごいなんかどうしようもなく、すごい私が同情しちゃってて、この人なにが出来るんだって考えてて、どうすればいいんだろうって相談してたら、大竹が『いや私はそんなどうしようとか思わないよ。私はあんま優しくもないのかも』みたいなこと言い出して、いやいやいやそんなことないよっていうのを否定した曲なので。っていうのを思い出しました」



——「みみでかちゅうでの活動とそれ以外での活動との違いは？」

高野「最近6月くらいに（お誘いがあって）新しくバンドに入れてもらって。それが"17歳とベルリンの壁"っていうバンドなんですけど。そっちのバンドだとけっこう分析的に演奏していて、みんなが。なんか音域がどうかっていうのを一回演奏する毎にみんなで話し合っていて。私はその、感覚でやってるんで浮いてるんですけど、なんかその理論的なこういう考え方できるようになりたいなって思いながら、みみでかちゅうで入ってなんかそういうのをフィードバックしたり。あと、もう一個のバンドだと、だいたいベースラインとかも作り込んでいて、曲作る人が。なのであんまりその、変えるところとかが無いんですけど、みみでかちゅうでまあいろいろ冒険っていうか自分の引き出しを広げつつ、なんか相乗効果みたいな、どっちも良い方向に進めれば良いなって」

——「川鍋さんはバンドとソロの活動がありますが、どうですか」

川鍋「バンドは私だけじゃないので・・・メンバーもいるし、メンバーと合わせるとか。なんか自分が、なんていうかな、弾き語りとは自分が間違ったら自分のせいなので、自分にだけ責任がくるから意外と間違ってもへらへらしちゃうんですけど。バンドはそうもいなくて、間違えないように頑張ってる(笑)。そこの違いと、あと、そうですね、曲のイメージが意外と『こういう曲やりたい』って持って行くんですけど、それと、バンドをやるとけっこう面白いアイデアが重なり合って全然イメージと違くなる感じがして。なんかやっぱり、自分の曲の違う面を見るためにバンドをやってるかもしれないですね。違いはあんまり・・・曲も分けてないし。ただなんかこれをバンドでやっても面白くないかなっていうのを弾き語りでするかもしれないですね」



——「音楽をやるうえで決めてることやモットー、譲れないことなどありますか？」

高野「ああ・・・あります、変な英語で歌う人とやりたくない」

小倉「(笑)」

川鍋「(笑)」

高野「なんか日本語でちゃんと歌ってる人がいいなと思って、自分の言葉で。なんか英語でもいいんですけど、その、英語を自分のものとして使える人ならいいんですけど、なんか格好だけで英語を使ってるような人はすごい嫌で。いい曲でも、これ日本語だともっと良いんじゃない？って思うことよくあるし。なんかその、英語がどうかっていうより、自分の言葉で歌ってるような曲が良いですね」

川鍋「やっぱり、なんか自分が曲と言葉を、なんだろう、なんかその。確かに、そう、やりたいことはやりたくてこだわってるっていうのは、やっぱりメンバー2人に一番に解釈し

てもらって、そのことを一番伝わる方法で3人で探り合ってやってけばいいっていうのを、やりたいってことをちょっと、ハッとしました。自分のやっぱり言葉とか世界観・・世界観とかあるかわかんないですけど、なんかそれをやっぱり理解してもらえた人と音楽をやるっていうことを(笑)やりたいかもしれないですねー、わかんないですけど。なんかはい、ハッとしました」

小倉「あんまり、こだわりは・・うーん。やっぱり自分の良いつて思う音楽をやってる人と一緒にやりたいし、うーん。なんかやると『あっ今のいいね』って言ってくれる、褒めてくれる(笑)、あんまり怒らない人とバンドしたいって思っいつもバンドして、選んでます」
——「みみでかちゅうはどうですか？」

小倉「みみでかちゅうは、すごい居心地が良くて。ダメだって思っっても怒られないし(笑)。『あー今日練習してきてないや』って言っっても、私はすごいあーやばいごめんって思っんですけど、それ以上怒られないっていうか(笑)。みんなありがとうって思っってます。のびのび出来るところで良いと思います」



——「お互いのバンド内での役割は何だと思っますか？」

川鍋「私は曲を作ることかなって思っってますやっぱり。本当は、運営的なことも・・例えば良いライブハウス見つけてくるとか、どう売り出そうとかもやればいいんですけど。それがやっぱり、なんていうか、それについての議題を出されたら考えることは多少できるんですけど、なんかそのテーマを出して、うーんなんていうんだらう、運営とか苦手だなんていつも思っます」

高野「私は、うーん、きっかけを作りたいと思って、いつも。うーん例えばなんか、ここでやっの方が良いと思ったことを、たぶん言わなかつたり言えなかつたり思っ付かなかつたりっていうのがみんなあると思っんで、積極的にそういうところを気付いていきたいとか(笑)。うーん、なんかこう、マンネリっていうか、曲作り？とかアレンジが行き詰まったときに、なんか違うものを入れられるようになりたいな、とかは最近意識してて」

小倉「ちむが曲を作ってきて、高野がアイデアを出して、うーん、その出来てきたものをそつと支えれば良いかなって思っってます(笑)。あんまり上手くなくて、あんまり大きい・・目立とうとしなくてもいいから、なんかりズム刻んで、全体がどんどん動いていけるように、後ろからフッてやってる存在でいれば・・いたいなって思っます」



——「お互いバンドメンバーについて尊敬しているところや直して欲しいところなど・・恥ずかしいかもしれないですけど、あまりない機会だと思っるので」

小倉「ちむはいろんなアイデアが、いろんな曲が作れて。なんかこう、多分ちむの頭の中はごちゃごちゃなんだろうけど、そこから良くこのフレーズを頑張って捻り出してるとなってると思うところが・・・なんか選択の仕方というのが凄いなって思うんですけど。そのせいか知らないんですけど、自分のコントロールがあんまりうまくなくて、そこが、うーん、そこも頑張っていずれできるようになればと思ってます。高野も、ちむの言いたいことを頑張って汲み取って、こうしたらいいんじゃないかみたいなフレーズのアイデアとか、全然想像できないことを急に『これいいんじゃないですか』って弾いたのがすごい良かったりして。雰囲気を作っていくのがうまいです。嫌なところは・・・(笑)。まあ、段々なんか、話し方が独特だから似てきちゃって、『高野さん意識しないで下さい』ってよく言われるようになって、『それ高野さんのマネですか』みたいな、それが嫌です(笑)」

高野「うーん、うーん、うーん。うーん、どうしよう(笑)。ちむさんに関してはけっこう小倉さんと一緒なんですけど、なんか何でも曲に消化できちゃうのはすごい羨ましくて。なんか、それで感情の整理とかしてるんだらうなと思うし。それから、なんか、その根源的なところで曲を作ってる気がして、それはすごい面白いし、良いなって思います。『作らないといけない』みたいな、『作らないとおかしくなっちゃう』っていうかなんかパンパンになっちゃうから、それをなんか浄化するみたいな感じなんじゃないかなと思って。あと、なんか、うーん。言うことが面白い(笑)。全然関係ない、関係ないっていうか、意識しないところで面白いのが面白い(笑)無意識に。(直した方がいいところは) うーんまあその、コントロールっていうのは・・・まあ長所と表裏一体とは思うんですけど。うーん、自分の良いところをもっと生かしていくようになったら良いなって。小倉さんは、良いところ、好きなのは、マイペースで自分を崩さないところ。直して欲しいっていうか、直して欲しいところは(笑)、けっこう流されやすい気がする。雰囲気に吞まれやすいから、何か思ったことがあったら言って欲しいなって」

川鍋「うーん。やっぱそのなんていうか、自分に無いところが多数あるので。まあその、うーん。うーんなんか、冷静に物事みれるところとか(笑)。どっちも割とみれると思うんですけど、なんか最近では本当に何だろう、意外と高野さんがなんか、本当に何ていうのかな、分析的というか(笑)。意外と、意外とでもないのか。すごくそういうところで、やっぱそういう人を、自分が持ってない分なりたいたって思うし尊敬もするので。良いものを選べる、なんていうのかな、まあ選んでいくっていうか、なんか意外と、それこそその場に流されないところとか、意思を持ってて尚且つ、なんていうのかな、本当にコントロールが上手いなあって最近思いますね。(直して欲しいところは) うーん、しっかりしてるからこそなんか、相談しないっていうか(笑)。相談して欲しいときに相談してくれなかったこととか、しょんぼりしたので。なんか喋るだけでも良いからして欲しいかなっていう感じですかね」
—— 『(新しく) バンドを始めたことを言ってよ!』って言ってましたよ」

高野「ああそれ怒られました(笑)」

川鍋「そうそれぞれ。それもなんか自分が良くない状況にしてたが故の、ハウレンソウが無

くなっただってということだと思うんですけど。本当にそんな感じですね。なんか意外と私、割と何でも人に言っちゃうので、それが羨ましくもあり、けど寂しくもありっていう感じですね。小倉さんは、えーっと。なんか優しいですね、本当に思いますけど(笑)」

小倉「(笑)」

高野「(笑)」

川鍋「なんか、優しくない・・・見た目的にはちょっと、初めて会ったときとかちょっと強気なこわい人なのかなって思ったらその逆みたいなの。なんかすごく優しいから、なんか甘えなくなっちゃう感じがして。なんか、私けっこう頼りないから。頼りないからあんまり相談されない感じもあるんですけど、その逆かなって思ってます。直して欲しいところは・・・直して欲しいところ？(笑)。直して欲しいところは、うーん。なんか、たまにしっかりしてない時があるので、しっかりするところ。いや自分もしっかりしてないんですけど。まあ、そうですね、そんな感じですかね」

——「わかりました。だいが・・・」

小倉「高野の不満を変更して良いですか？」

高野「ええっ！(笑)」

小倉「真似ちゃってるのは本当に真似ちゃってるから別に高野の不満点ではなくて、変更で。あんま特に無いんですけど、たまに遊びたいなって思います。もうちょっと頻繁に遊べないかなって思って(笑)。もうちょっとゲームとか一緒にしたいけど、タイミングわかんないし誘いづらいって・・・ことにして下さい」

小倉「(笑)」

川鍋「遊びたい」

——「遊びたいのはみんな一緒なんですね(笑)」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

——「バンドをやってて印象的な出来事ってありますか？分岐点だったなあとか、嬉しかったこととか後悔とか、何でも良いんですけど」

川鍋「前のドラマーの佳奈美ちゃんが辞めるときに、本当に私は佳奈美ちゃんにけっこう色々精神的に支えてもらっていたので、『佳奈美ちゃんが辞めたら私なんにもできないわあ』みたいなこと言ったら、佳奈美ちゃんに『私とやるためにバンド始めたんじゃないでしょ？』って言われて」

小倉「へえー、しっかりしてるなあ・・・」

川鍋「『私いなくてもやったでしょ』みたいなこと言われて。それはすごい今でもハッとすることですね」

高野「こないだ、つい先週なんですけど、スタジオに入ったときに、ちむさんがギター之音が出ないって困ってたら、エフェクターの順番とかつなぎ方がぐちゃぐちゃで(笑)、『私ギ

ター7年目なのに！』って言ってたのが今更ながら衝撃で。あともう一個、なんかうろ覚えなんですけど。まだ西原さんがベース弾いてたときに、なんかちむさんがカポで弾く曲を作ったみたいな感じで、ギターにカポをつけたんですけど、カポの上を弾き始めて『ん？』とか言ってなんか面白くて(笑)」

小倉「(笑)そんなことあったんだ」

川鍋「(笑)」

小倉「前やってたバンドはガールズバンドなんですけど、けっこうストイックで。一応キーボードやってたんですけど、周りみんな先輩だし間違えたらすごいダメだって思ってたんですけど。みみでかちゅうに入って、ちむが、スタジオとは違う音を出したり、いきなりエフェクトが暴走したりするんですけど、でも私から見たらそんな問題じゃないなって思ってた。別にそれはそれで、まあ"らしさ"が出て良いんじゃないかって思うし、そのあとすごい落ち込むんですけど、そんな落ち込むことでもないんじゃないかって思ってた。ライブで間違えちゃダメだって思わなくても・・・周りから見たらそうでもないんだみたいな(笑)ことがわかって良かったです」

——「一客として言わせてもらおうと、そういうアクシデント込み込みでメチャメチャ楽しんでます。なんでこんな変なハウリ方してんだろうみたいなこととか(笑)。魅力の一つだと本当に思ってますけど」

小倉「前のバンドで間違えてたらやっぱりちょっと問題じゃないかって思ってたんですけど、全然違うんじゃないかって思ってた、それが良いバンドだなって思えたし。っていう気付きがありました」



——「新作のことで色々聞きたいんですけど、まず、10割で完成だとしたら何割くらいの段階ですか？」

川鍋「どの辺なんだろう。けど歌も入れてないんで、4割？5割？」

小倉「もうちょっといってるんじゃない？」

川鍋「6割？7割？」

小倉「7割くらい想像してた」

川鍋「じゃあ7割。どんくらい？」

高野「6.5？7弱？」

川鍋「7弱」

——「タイトルを教えてください」

川鍋「タイトルは"人生は時々晴れ"、アルバム名です」

——「何曲入りですか？」

川鍋「4曲入りにしようと思ってるんですけど、いまレコーディングしてて、なんかバラン

スが取れない可能性があって、ってこの前（レコーディング担当者に）言われました」

小倉「それってアルバムのってこと？ 曲数的とか曲の雰囲気的にバランスがとれないとかそういうこと？」

川鍋「そうかも、曲の雰囲気的に。その4曲、うーんまあアリっちゃアリだけどみたいな感じに言われて。けど自分が歌を入れたらそれが統一化される可能性もあるので。何とも言えないんですけど」

——「レコーディングはどういう状態まで、現時点で」

川鍋「リズム隊は録ってもらって、終わってます」

高野「一年前くらい」

川鍋「一年前くらいに。すみません(笑)」

小倉「全然でき度が違って、録り直したくなってるんですけど、いまさら言えない」

——「ギターは外部の方に」

川鍋「外部の方に。"ガウディーズ"、"釈迦釈迦チキン"、"カズコックス"の尾崎くんです。私と違ってギターを弾くことが好きなギタリストなので。私が弾くとどうしてもパンク要素が生まれるんですけど、彼はパンク要素持ってないので、もっと歌が聴きやすくなるギターかなと思ってます」

——「その録音は今やってる途中ですか？」

川鍋「一応、彼の弾くところも終わって、あと私が、"しあわせ"(*13)のギターソロとか、もしかしたら"情緒不安定"も自分がギターを弾いた方がいいんじゃないかって思ってたので、そこは録り直すかもしれないんですけど。そんな感じです」

高野「2曲、尾崎ギター？」

川鍋「そう。"しあわせ"と"お月さん"は尾崎が弾いてくれてて、すごい良い仕上がりなので。"情緒不安定"弾いちゃうと、なんか情緒らしさが無くなっちゃうので、それは私が弾いても良いかなって。すごい最近、昨日の話なんですけど」

——「"情緒不安定"も入るんですか。4曲っていうのはちなみに・・・」

川鍋「"しあわせ"、"会話"(*14)、"情緒不安定"、"お月さんとうさぎさん"です」

——「"会話"はどこかで披露したことはありますか？」

川鍋「ライブでは前やったんですけど」

——「どういうやつですか？」

川鍋「わかるかな、チャッチャッチャッチャッ♪っていう」

——「ああ、曲の展開がめちゃくちゃ変わってるやつですよ」

川鍋「ぶっ飛んでる」

——「あの、深夜の渋谷のライブの一曲目ですよ」

小倉「ああそうかもー」

——「あの曲めっちゃめっちゃヤバイですよ」

高野「(笑)」

川鍋「(笑)ヤバいですよね、作った自分でもヤバいって思いますもん、これはさすがに」
——「最後の方、なんか変な感じで終わりますよね。ああ楽しみです。"会話"っていう曲名
なんですか」

川鍋「"会話"っていう曲名です」

——「ああ、嬉しいです(笑)。早く聴きたいです」

川鍋「ありがとうございます。やったー」

——「じゃあその4曲」

川鍋「そうですね4曲。プラス、入るかもしれないけど、ちょっとまだ未定です」

——「発売日はまだわからないですよ」

川鍋「ちょっと気が長く、まだですね(笑)。今年中にリリースしたいとは思ってるんです
けど」

高野「遅っ(笑)」

川鍋「本当？でも意外と作ってるとなつちやうんだなってつくづく思うよ、うん」

——「CD-Rですか？それともプレス盤を作るんですか？」

川鍋「プレス盤ってなんですか」

——「プレス CD、あの工場で」

川鍋「ああそれはないので、CD-R 自分で焼いて」

——「売り方とかはどういう・・・ライブ会場で売ったりとかお店に置いたりとかはありま
すか？」

川鍋「何となく置けるお店には置こうかなとは思ってるんですけど。あとまあライブで置い
てって感じですかね」

——「具体的にこのお店とかありますか？」

川鍋「まだ調べきれてないので、なんともなんですけど。うーん」

高野「それは特にないです・・・ないっていうか、あんまりアイデア無いんですけど。言ってい
いのかわかんないんですけど、前ちむさんが言ったのが"ディスクユニオン"とか"ココナッ
ツディスク"とか置きたいと」

川鍋「それとかあの、あれですよ。"箱入り気分"とかが置いてたところ。高円寺のなんだっ
け」

——「"円盤"？」

川鍋「そう、円盤とか。何でも置けるところは置こうかなと思って今回は」

——「円盤の店主の人は多分みみでかちゅうを面白いと思う人だと思うんですけど」

川鍋「そうだと良いなと思います」

——「僕がもう買って置きに行きたいくらいですよ」

川鍋「本当ですか(笑)。なんと、嬉しい」

——「ライブハウスの場所を変えるよりもお店のいろんなところに置く方が簡単なのは簡単
だと思うんですけど、気持ち的に多分」

川鍋「そうですね。そうだなって思いました、喋ってて。けどライブハウスはちょっと・・・家帰って反省します」

——「(笑)なんか、PVとか作ったりしないんですか？」

川鍋「作りたいんですけど、えっとあんまり、良い賛同を得なかったので(笑)」

——「僕は作って欲しいです、個人的に」

小倉「(収録曲の中から)どれで・・・」

——「いちばん柱になる曲はなんですか？」

川鍋「"しあわせ"だと思うんですけど、意外と昨日録ったら、"会話"がかなり個性的。個性的っていうかなんか、かなり良い曲になったよ、聴かせたい！」

小倉・高野「へえー」

川鍋「しかも、2人も納得すると思う、すごい良い。すごい良くなったので、"会話"でアニメーションとか面白いかなって、お金があればやりたいんですけど。でもまあ"しあわせ"ですかね(笑)」

——「"しあわせ"ですか、僕も"会話"が・・・良いんじゃないですか」

小倉「(笑)」

川鍋「本当ですか。"会話"は確かにぶっ飛んでるので、ちょっといいかなって思います」

——「まあその冒険していいんじゃないですか」

川鍋「しようかな。そうですね、した方がいいと思います」

——「レコ発とかやるんですか」

川鍋「やるんですかね(笑)」

小倉「もう終わっちゃいました、11月・・・」

川鍋「終わっちゃいましたね」

——「あそこで本当は出す・・・ああ」

川鍋「出したかったんですけど全然間に合わなくて、何だったんだみたいな感じになったんですけど」

小倉「(笑)」

高野「レコ発っていうか企画(情緒不安定ナイト)と一緒に出したかったんですよ」

川鍋「うん、そうだね」

——「でも今回発売するときに、またライブ・・・まあ企画じゃないにしてもやって欲しいです」

川鍋「そうですね。まあなにか露出しないと売れないと思うので、売れるものも。取り敢えず出とかなないと。なにか、地球上に出とかなないと(笑)。沈んでるだけだと、こもってるだけだとダメだと思うので。まあ確かに何かしなきゃなとは思ってます」

——「なんかその、通販とかもやったらどうですか？大々的に」

川鍋「どうやればいいんですかね、全然わかんないんですけど」

——「まあ販売ページ・・・こっから買えますとか言って」

川鍋「ああ普通にやればいいのか、ホームページで。確かにそうですね。それは良いアイデアです」

——「あとホームページあんま更新してないですよね」

川鍋「もう消えちゃいました」

高野「もう死んでます」

——「あっ死んでるんですか。なんで死んでるんですか」

高野「更新をしないえサーバが止まったので。ちょっとマイナーなサーバを使っていたため、広告を出したくなくて。それで、うーん、私が作ったんですけど、作ってるうちにコンセプト・・・コンセプトっていうかあんまり出来栄えに満足しなかったため、放置をしてしまい。あと、なんかあんまり、なんか、サイトを作った意味っていうのを見出せなくなってしまって、誰か見てる人がいるのかとか。まあ自分の・・・(笑)、上手くできなかったのがサイトを更新してないっていう一番大きな理由だと思うんですけど」

——「でも Tumblr はやってますよね」

川鍋「最近やんなくなっちゃったんですけど・・・今日から頑張ります。頑張ろう」

——「まあでも外の人が言ったところで多分やんないと思うんですけど(笑)」

川鍋「ブログを書くのは好きなので、やる気があれば、見る人が一人でもいればやると思うんですけど。頑張ります、またやろう」



——「機材とか、エフェクターは使ってますか」

小倉「あんまりそういうことは・・・」

高野「禁句・・・(笑)」

小倉「繋げなかったんですよこないだ」

川鍋「エフェクターは人からもらったものを使っていて。全部もらいものか作ってもらったか。全然価値もわかってないし」

——「気に入ったこうしたいという音作りとかあれば」

川鍋「なんかまあ(笑)。なんか高野がこの前いつかにギター（の音を）を作ってくれて、良い音だったので」

小倉「アンプでしょ？いじって」

川鍋「良い音でした」

——「良い音でした・・・(笑)」

高野「(笑)」

小倉「終わり(笑)」

川鍋「そう、それに近付けるようにいつもなんか高野に教えてもらったコツとかで(笑)。アンプの話ですねこれは、エフェクターじゃないですけど」

小倉「写メってたよね」

川鍋「写メった写メった。けどやっぱり、どのアンプでもそういう音を出さないといけないってのは流石に言われるので。音に対するイメージは前よりかはまだマシになったと思うんですけど、全然全然ダメなので、もっといろんな音楽聴こうと思います」

——「いま弾いてるギターはどのようなギターですか？」

川鍋「ストラトです。前のギターよりは良い音がするって言われます」

高野「えー。なんかでも、ゴミみたいな音って言われたときありましたよ(笑)」

小倉「(笑)」

川鍋「言われたわー。しかもダサイから今すぐ変えろとか言われて」

小倉「(笑)」

高野「(笑)。すごい音してます確かに。何が変わったんですか？」

川鍋「意外と前までは、もっと曇った音を出してたんですよ私。良い音っていうことがなんか曇った・・・バスめっちゃ出た音みたいなのが良い音ってなってたんですけど。最近なんか違うってことをここ数年でわかってきて、もっと透き通る音を目指しつつ、けどなんか・・・はい」

——「それこそ"会話"のジャッジャッジャッっていうのはクリアな方がかなり良いと思います。前の深夜のライブのときはいきなりあれで始まったのが印象的でしたねかなり」

川鍋「本当ですか」

——「というかあのライブはみみでかちゅうの中で一番すごいと思ってて。というよりライブ経験の中で1位2位くらいの。本当にクラクラするくらい凄かったです」

小倉「へえー」

高野「(笑)。えっなんでですか、それは」

——「なんか勝気に溢れてて・・・川鍋さんも珍しく堂々としてたというか」

川鍋「そうですね、あのときは堂々としてたし自分の中でも良いライブできたみたいなことが。達成感というか、あっこれのライブ常にやりたいっていうか、思いました」

——「スティックはこれじゃないとダメだとかありますか？」

小倉「ないですよ(笑)。ないですね」

——「高野さんは」

高野「こないだまで赤いグレッチの空洞のベースを使ってたんですけど、なんか買った当初から音がモコモコしてて、めっちゃくちゃ気に入ってた訳ではなくて。それで最近ちょっと良いジャズベを買いました、黒い。」

——「それはお披露目したことはありますか？」

高野「それはないですね。スタジオにもまだ持ってったことないです。次回、ライブで使おうかなと思って」



——「じゃああの、全国のリスナーに向けたメッセージを」

小倉「(笑)」

川鍋「(笑)。うーん、なんか最近ちょっと、初期に自分がバンドを始めた頃の気持ちを思い出しまくっていて、本当にそうですね、なんか、うーん。なんか自分、えー(笑)。自分だけじゃないこの感情はみたいなのを確認したくて、やっぱり歌詞を書き始めたのがあるの。その確認を出来るだけ多くの人と出来たら良いなと思います」

——「それは川鍋さんが音楽をそういう風に聴くからということですか？」

川鍋「そうだと思います。特に若いとき(笑)は本当にそう聴いてたので」

——「高野さんは」

高野「もっといっぱい人が聴いてくれると嬉しいですね。終わり(笑)」

——「なんでいろんな人に聴いて欲しいんですか？」

高野「えーっと、個性的だし変だから。小学生みたい(笑)」

小倉「聴いて良いなって思う人がいたら教えて欲しい」

高野「褒められたい(笑)」

小倉「(笑)」

川鍋「褒められたいわー」

小倉「で、どういう界限に行けばそういう人に出会えるのか教えて欲しい。アドバイスを下さい(笑)」

——「アドバイス・・・。"円盤"に CD を置いて、"無力無善寺"でライブしたらどうですか・・・(笑)」

川鍋「本当に最近はそうだなって思います。無善寺、好きじゃないけど」

——「まあ好きじゃなかったらなかなか・・・」

川鍋「いや、その好きじゃないを超えていけて感じですね、ちょっと」

高野「退室しちゃうんですよ、イヤすぎて。"無善法師"がこわくて(笑)」

小倉「(笑)」

——「あんな場所にいる人だから悪い人じゃないし出来ないですよあんな場所、長年。あんなドロドロしたお店」

川鍋「そうですね、いや本当そう思います」

高野「私が見みでかちゅうまで入ってないときに、ちむさんが無善寺に出たとき見てたんですけど、すごい雰囲気が合っていて。曲もその頃なんか和風のちょっとドロっとしたやつをやったりして、そのドロドロしたけどファンシーな雰囲気とあと赤と黒みたいなのがすごい合っていると思って、写真撮った気がします。似合っていて」

川鍋「出ることから始めます」

——「ウケは今いるところよりは良いと思いますけど。じゃあこんな感じで終わりにしますので。ご協力ありがとうございました」

川鍋・高野・小倉「ありがとうございました」

メンバーが次第に川鍋さんのことを"ちむ"という愛称で呼ぶようになって、これは本音で話をして下さっていると思えてありがたかった。冷静に振り返ると脈絡の無い流れだし、図太い質問も多いですが、メンバーそれぞれの個性が覗き見できるインタビューになったと思います。このインターネット時代、検索すればいろいろ出る。Modern Music Troop のホームページに行けば過去のスタジオ録音ダウンロードできるし、Youtube ではライブ映像が見れるし、SoundCloud では貴重なスタジオ一発録りが聴ける。要チェック！

(*1) 大竹めぐみ。第1期みみでかちゅうのベース。

(*2) 第6期に制作された楽曲。元メンバーの詞で新曲を作るとは珍しい。デモ音源がSoundCloud で試聴できる。<https://soundcloud.com/mimidekachu/20140301-1>

(*3) 第1期に制作された楽曲。ライブで頻繁に演奏される代表曲。早稲田大学のバンドサークル「Modern Music Troop」がウェブ上でリリースしているコンピレーションアルバム (Modern Music Tracks) の Vol 9.0 "カク"に収録されていて、無料でダウンロードできる。
<http://mmtweb.main.jp/compi.html>

(*4) 滝口若菜。第1期のドラム担当。

(*5) 塩谷結衣子。第2期のドラム担当。

(*6) 西原俊平。第2期～第4期のベース担当。

(*7) 第3期のドラム担当。

(*8) 杉浦結衣。第4、5期のドラム担当。

(*9) 川鍋の愛称。

(*10) 第4期に制作された楽曲。Modern Music Tracks 11.5 "10mm" 収録。無料でダウンロードできる。<http://mmtweb.main.jp/compi.html>

(*11) 第3期にリリースされたバンド初の自主制作音源。"けっこう毛だらけ猫灰だらけ"、"月"、"通り雨"の3曲収録。それぞれ"Modern Music Tracks"にも収録されている。ただし、

"けっこう毛だらけ猫灰だらけ"のテイクは両者で異なる。"ひとりあそび"収録のテイクはねっとりとしていて生々しい。

(*12) 2013年11月、池袋ミュージックオルグで行われたバンド初の自主企画。共演は"サカシマ"、"Fat Fox Fanclub"、"フィルムズ"。

(*13) 第6期に制作された楽曲。SoundCloud にアップされているこの曲のスタジオ録音は丸裸で、とてもとても素晴らしい。夜に部屋で一人でヘッドホンで。

<https://soundcloud.com/mimidekachu/20130601-1>

(*14) 第3期に制作された楽曲。みみでかちゅうのあらゆる魅力を凝縮したような1曲。全部詰まってる。忘れもしない2013年9月21日深夜、渋谷7th FLOORでのライブ、この曲のイントロで気が狂いそうなほどしびれた。

愛憎みとみと

急きよ書かなければならない。こんな文章を書きたくなかった。みみでかちゅうは活動をやめたい。2014年10月4日、朝起きてツイッターを眺めて知りました。

おはようございますみみでかちゅうの川鍋です。朝刊が街に出回り終わったころでしょうか。本日はお伝えしなければならぬことがございまして文章を書いています。動く世界とみみでかちゅうが繋がることができるツールがツイッター以外ないのでツイッターでお知らせすることをお許してください。

この度9/24のライブをもちまして *dr.cho* 小倉真帆路、*ba.cho* 高野恵理子、*vo.gt* 川鍋智子から成り立つみみでかちゅうは活動をやめました。突然のお知らせになってしまったこととお詫び申し上げます。

今までこの3人でうみだして奏でて表現した音楽を聴いてくださった方好きだといってくださった方動画を見てくださった方ライブを見てくださった方たくさんお世話してくださった方かわってくださった方本当にありがとうございました。

重たくなる。ソレそのまま「解散」という言葉は出てこないけど、どうやらそういうことらしい。目覚めの穏やかな日差しが一気に生暖かい蒸気に化けたような心情。啞然はへぬるかった。9月24日、渋谷7th FLOORでのライブは結果的に解散ライブに成り果ててしまった。"解散"ライブの無断録音音源を聴き返して頭が無になる。この日に披露された新曲"最

終回"が他意どころか本意を持って耳をくじく。心のバンドが一つ消えた。

何もとりえのない私ですから、この世の方々と正直に誠実に向き合うことが、無力な私が今考えるせめてものリスペクトであると思っているのでこの場でみみでかちゅうの活動をやめることについてできるだけお話しします。

まずこの活動をやめるということを決めたのは私であるということです。

何度もメンバーチェンジを行ってきた中で、なぜみみでかちゅうの活動をやめることにしたのかというと、この3人で活動して作って奏でて表現したみみでかちゅうがみみでかちゅうという単語に最も近い手段で表現できていたのではないかと思うからです。

みみでかちゅうという言葉は私の知る限り日本の辞書には載っていない言葉だと思っているのですが、この3人での演奏を目撃してくださった方々、それがみみでかちゅうという言葉の概念に最も近いものであったのではないかと思います。

活動をやめるということを決めた理由はメンバーに対する小さな違和感とみみでかちゅうが奏でる音楽に対する小さな違和感が日々積もっていつってしまったことで私自身が不信に陥り、前向きな活動をしたという心を持つことができなくなってしまったということです。

迷いというものは随分前から存在だけはしており、何度も明日は、あさっては、数か月後には自分の気持ちは変わるだろうと思いました。しかしその願いとは裏腹にここぞというときにメンバーとみみでかちゅうを愛することができなくなってしまいました。

愛することができずにすぐになにかと疑ってしまう自分をなんとかしたかったのですが今の自分ではなんとかできませんでした。

この3人での音楽活動がなければ今の私はいません。2人には私の人生のたくさんの部分を支えてもらいました。時がたてばたつほど感謝の気持ちは大きくなるでしょう。メンバーとはバンドメンバーである以前に大切な友人の一人であり、それを失うことを耐えることは今も容易ではありません。

小倉真帆路の人生も、高野恵理子の人生も、川鍋智子の人生もこの先も続きます。言い忘れていることもあるかもしれませんが、この話は今はここまでとします。ここまで読んでくださってありがとうございました。

脳味噌をクレンザーで洗って、考える。みみでかちゅうとはどんなバンドだったか。乱暴に言い切るならシャググ的な羽衣をまとった歌ものバンドだけど、ギター&ボーカルの川鍋さんがその羽衣を毛嫌いしている（インタビューでも明らかだった）のがみみでかちゅうの興味深い点だし、バンドの根幹を成す要素だった。その羽衣が脱がされることも剥がされることもついぞなかった。最後期、その試みはあったようだけれど。みみでかちゅうを語る時にこの不可解な点を避けては通れないと思う。みみでかちゅうをみみでかちゅうたらしめている核をフロントマンが好いていないのは、ほとんど不思議だった。川鍋さんの言

う"違和感"とはその羽衣の着心地の悪さだと思うのだけれどこれいかに。

僕はみみでかちゅうを断片的にしか知らない。手に入る音源は全て聴いたけれど、ライブは6回しか観れてない。出会いはインターネットだった。早稲田大学のバンドサークル"Modern Music Troop"がホームページ上で発表しているコンピレーション・シリーズ"Modern Music Tracks"で初めて聴いた。コンピレーションの中で強烈な異彩を放っていたのがみみでかちゅうだった。一聴で虜になった。そして、2012年2月28日、新宿URGAへライブを観に行った。その頃は第4期みみでかちゅう。コンピレーションの音源よりもボーカルがねっとりしてダークさが際立ち、たまらなかった。"風邪をひきたい"のギターソロにしびれ、"君のいない風"という名曲に打ちのめされた。("君のいない風"は後にも先にもこのライブでしか聴いたことがない。ライブ映像はYouTubeにアップされている。)その次に観たライブは、2013年9月21日 at 渋谷7thFLOOR。既に第6期(最後期)。このライブがえげつなかった。いつだか僕が死ぬときにも3本の指に入っているライブだと思う。特に始めの3曲("会話"、"情緒不安定"、"けっこう毛だらけ猫灰だらけ")の流れがあまりに見事で昇天するかと思った。体の細胞ひとつひとつが震え、踊りだすような悦。高野さんと小倉さんは各々の仕事を石工職人のようにこなし、川鍋さんは勝気に満ち溢れていた。ぐうの音も出ないライブだった。その後は、同年の自主企画"情緒不安定ナイト"at 池袋ミュージックオルグ、年末の高円寺二万電圧、今年4月の新宿モーション、そして9月の渋谷7thFLOOR(事実上の解散ライブ)に足を運んだ。まだまだ観たかったよ。こんな文章を書きたくなかったんだって。

川鍋さんはバンドのフロントマンだけど一番遠くに居た。おそらく、みみでかちゅうの音楽の鳴り響き方も随分違うんだろう。ただそれでもやっぱり、みみでかちゅうはそんな川鍋智子のバンドだった。仮に彼女が表層的な(それでいて決定的な)魅力を魅力だと自負していたなら、これほど奇天烈な楽曲群は誕生していないだろうから。複雑にねじれた砦そのものがバンドの本尊であって、周辺に落ちている結晶は砦のかけらを磨いたものにすぎない。抗う砦と肯定する結晶。その転置された真実は突き付けられたのか、引き金は引かれたのか、賽が投げられたのか、もはや決して誰も彼も無関係では居られない。その強迫観念を抱く演技と本心との間で自我を保つ人々が確かにいた。感傷に浸るというよりは、思い出を冷静に睨みつける。セピア色の写真の切れ端が脳味噌の荒野に落ちてきたこともあったし、滝を登る鯉のようにシナプス畑の溝からミシン針が顔を出すこともあったし、ただただ灰色のソフトビニル製の人形を見ていることもあった。平凡でこそ高貴な私小説。作業と知覚を経てさえいけば、それは都市の人口の数だけある。ただ、そういう物語と無関係な美しい真実として、彼女の非凡なメロディ感覚や言語感覚は羽衣の内側で煌々と輝きを放っていた。少なくとも僕にとっては明白です。一目瞭然。

好きなバンドが終わるのは常に悲しい。ゆらゆら帝国が終わって、東京事変が終わって、みみでかちゅうが終わった。実に繊細で不安定で愛おしいバンドだった。人間が音を鳴らしている数少ないバンドの一つだった。ああ。バンドが消えてもメンバーは消えないし、作品

は消えないし、思い出も消えない。冷静に考えれば消えない尽くめだったので何ら問題はない、と凄むことはいくらでもできるのだけれど、それでも。消えたくても消えたくなくても、消したくても消したくなくても消えない。この人生ってなに？いつ人工隕石が落ちてくるかわからない。いつプランターの花が枯れるかわからない。いつ友達が、家族が死ぬかわからない。いつ何が起こるかわからないのだけれど、でもそれが明日に起こることはない。だって明日は絶対に大丈夫だろ。そう思ってきた。けれど。なのに。好きなものから距離を置く人々の気持ちなんか理解したくなかった。もう既に、この世とあの世の境目で正座するような人生を歩む覚悟はできている。本当に僕の個人史にとってもかけがえのないバンドでした。ありがとう！さようなら

1年前から制作している音源は必ず世にリリースしますので、その時はよろしく願いいたします。それでは、そのときまで、さようなら。

みみでかちゅう覚書

◇活動歴

・第1期

ベース：大竹めぐみ

ドラム：滝口若菜

2008年秋ごろ本格的に発足。"情緒不安定"、"障子の穴"、"通り雨"、"昨夜の夜"(没曲)を作成。主にサークルのイベントに出演。2009年4月、大竹、滝口脱退。2009年4月2代目ベース西原俊平、2代目ドラム塩谷結衣子加入。

・第2期

ベース：西原俊平

ドラム：塩谷結衣子

2009年春発足。"けっこう毛だらけ猫灰だらけ"を作成。サークルイベントに出演。

・第3期

ベース：西原俊平

ドラム：池田佳奈美

2009年夏発足。"風船と私"、"ぴえろ"、"会話"、"雨雲"、"月"を作成。サークルイベントを飛び出し外ライブをはじめ。主に秋葉原クラブグットマン、新宿ウルガ("TOKYO

SWING")、高円寺クラブライナー("wild gun crazy")、UFO クラブ、無力無善寺、新宿 JAM、モナレコード、新宿モーションに出演。"wild gun crazy compilation vol.6"に"通り雨"で参加。三曲入り音源"ひとりあそび"リリース。2011 年 5 月 3 代目ドラム池田佳奈美脱退。

・サポート時代

ベース：西原俊平

サポートドラム：大垣翔

2011 年春。池田佳奈美東京不在により発足。"迷路"(未完)を作成。

・第 4 期

ベース：西原俊平

ドラム：杉浦結衣

キーボード&コーラス：高野恵理子

2011 年秋頃発足。"風邪をひきたい"、"お月さんとうさぎさん"、"君のいない風"を作成。主に新宿モーション、池袋ミュージックオルグなどに出演。2012 年 4 月 2 代目ベース西原俊平脱退。

・第 5 期

ベース&コーラス：高野恵理子

ドラム&コーラス：杉浦結衣

2012 年 4 月ごろ発足。"(君との)関係"を作成。主に秋葉原クラブグッドマンに出演。同年 6 月ごろ 4 代目ドラム杉浦結衣脱退。

・第 6 期

ドラム&コーラス：小倉真帆路

ベース&コーラス：高野恵理子

2013 年 4 月ごろ発足。"しあわせ"、"砂の城"、"いわないよ"、"最終回"を作成。主に秋葉原クラブグッドマン、新宿レッドクロス、渋谷セブンスフロア、新宿モーション、代々木ザーザーズに出演。池袋ミュージックオルグで初の自主企画"情緒不安定ナイト"実施。2014 年 10 月 4 日、活動やめました宣言。

※資料提供：川鍋智子

◇リリース作品

・自主制作音源

『ひとりあそび』... "けっこう毛だらけ猫灰だらけ"、"月"、"通り雨"収録。

バンド初の音源。垢抜ける前のみみでかちゅうの姿を捉えた貴重なネガだ。"けっこう毛だらけ猫灰だらけ"はアップテンポの不可思議ポップチューン。終盤のリフレインは一度聴いたら病みつきになる。みみでかちゅうを語るのに「反復」というキーワードは不可欠だろう。このテイクは「これぞ（私の好きな）みみでかちゅう！」と叫びたいくらいねっとりした強烈な個性がにじみ出ている。間違いなく本音源の白眉。"月"は川鍋流の和風歌謡と呼んでも良いか。這う野太い蛇のようなベース、スネアをもったいぶったドラミングが印象的。転調を上下に繰り返す展開も凝っている。"通り雨"はしっとりとしたスローナンバー。キメの部分、もはや語尾だけなのに「きたあっあー♪」でキメているのが可笑しい。普通こういうことにはならないけれど、こういうことになってしまうところがみみでかちゅうの魅力なのだと思う。「自分が一番醜いと気付いてしまった」直後に天使のようなコーラスが聞こえてくるのも楽しい。そして忘れてはいけない、ベースソロがニクい。

『20131109-情緒不安定ナイト vol.1』... "太陽(深夜 3 時 ver.)"、"砂の城(ひとりの部屋 ver.)"収録。

歌とアコギとキーボードを軸に据えたドラムレス編成の宅録音源。真っ青な海とヨットが入った小瓶のような小さな小さな宝物。バンド初の自主企画イベントの予約特"権"として配布された。部屋感が良い。"太陽(深夜 3 時 ver.)"は、日が回るという道理とそれに寄り添わない感情をスケッチしたような歌。歌唱はフラットで綺麗。川鍋さんの詞世界の根底には自然という大きな大きなものへの憧憬や畏怖が感じられると伝えたことがあったが、当人に別段その意識は無いようだった。「今日も昨日に引っ張られていく」という歌詞はどうやったら書けるのだろう。次曲のための前奏のように比較的あっさりと終わっていく。"砂の城(ひとりの部屋 ver.)"は、海辺の夕日が見えてくる朴訥とした歌。差し込まれる「あの子はいないよここにはいないよ」のフレーズは唐突だけど必然と思えてしまう。みみでかちゅうの聴き過ぎ？ 謎の低音ノイズが意図されない緊張感を与えている。アウトロで聞こえるトライアングルのような音色はぼんやりとした白い光で快い。

『人生は時々晴れ』... "しあわせ"、"会話"、"情緒不安定"、"お月さんとうさぎさん"収録予定。

現在製作中の（おそらく）みみでかちゅう最後の音源。

・参加音源

『wild gun crazy compilation vol.6』... "通り雨"収録。

"ひとりあそび"収録のテイクと同じ。

『Modern Music Tracks 9.0 "カク"』... "情緒不安定"収録。

自主企画のイベント名にもなった代表曲。ヤンデックを彷彿とさせるよどんだ音色で左右不揃いのギターが鳴っており、この曲の雰囲気を決定的にしている。また、ドラムが刻むビートが単調なだけにギターワークの特異性が浮き彫りになっている。合間の時間差ユニゾンに遊び心を感じる。この歌のパンチラインは、「私は馬鹿じゃない いい人でもない」でしょう。

『Modern Music Tracks 9.5 "あったか〜い"』... "けっこう毛だらけ猫灰だらけ"収録。

"ひとりあそび"収録のテイクとは異なる。こちらはスコーンと突き抜けて骨太なパンクチューンに仕上がって（しまつて）いる。テンポも速い。ティム・ライトを思わせる技巧的なベースプレイがバンドサウンドをしなやかに引き締めている。そんな中で巻き起こった終盤の奇跡的なポリリズムは必聴。蛇足ながら、筆者が一番聴いているみみでかちゅうのトラックです。

『Modern Music Tracks 10.0 "はなれず"』... "ぴえろ"収録。

バンドの自信や貫禄が力強く伝わってくる演奏。偉そうながら「堂に入っているなあ」という感じ。その瞬間のバンドを刻んだドキュメントとしての録音物の価値を再認識させられる。曲の展開、アレンジ、随所でセンスがキラッと光っているのだけれど、どこまで計算でどこから自然あるいは感覚なのだろう。ドラムの生々しいタイム感、「ペシッ」というスネア。ギターは水みみたいな音がする。「なんにも言えずに帰ってきた」の”かえっ”の部分とか、もう説明できないけれどたまらなくツボ。「泣きそうな天を〜」という歌詞をリズムを変えて繰り返す仕様なんか本当に恐れ入る。「明日になったらいなかった」という歌詞もすごい。逆立ちしても書けない。

『Modern Music Tracks 10.5 "アイツがオレで"』... "通り雨"収録。

"ひとりあそび"収録のテイクと同じ。

『Modern Music Tracks 11.0 "激"』... "月"収録。

"ひとりあそび"収録のテイクと同じ。

『Modern Music Tracks 11.5 "まだ足りない"』... "風邪をひきたい"収録。

どストレートな曲名。曲中でも「弱音を吐きたい」「風邪をひきたい」が連呼されるが、安直にニヒって終わりではなくラストに「本当は一人は嫌い」という率直な吐露が少しだけ漏れてくる点が信じられるし頷けるし好きだ。バンド演奏の成熟度としてはこの頃がピー

クではないだろうか。演奏も非常にタイトで洗練されている。高野氏のキーボードがバンドサウンドに新鮮な彩りを添えている。

『Modern Music Tracks 12.0 "10mm"』... "お月さんとうさぎさん"収録。

みみでかちゅう流の童謡もしくは絵本。「発言」にまつわる教訓が込められている。「月」や「雨」はこのバンドにとって欠かせないモチーフなのかもしれない。この曲でもキーボードが大きくフィーチャーされている。他方、ギターは振り子時計の振り子のようなアルペジオとカッティングで曲全体のリズムをジグザグに縫う。ライブではしばしばセットリストの最後に位置づけられた。

あとがき

いかがでしたか。文化ゆりかご vol.1 では、みみでかちゅう総力特集をお送りしました。当初、文化ゆりかご vol.1 は、みみでかちゅうのインタビュー+それとは全く関係の無いいくつかの記事、という構成にするつもりでした。しかし、そんな折、みみでかちゅうが活動をやめるという発表がありました。色々と考えましたが、そのことに触れずにインタビューを載せるのは違うと思いました（インタビューにそういう話は出てこない）。そこで思い切って、活動終了に関する文章、さらに活動歴と音源に関する情報も載せて、一冊丸ごとみみでかちゅうにした訳です。それではまた次号でお会いしましょう。さようなら。

[文化ゆりかご vol.1]

2014年10月26日発行

制作：宙空一派

r.kemekeme@gmail.com



宙空一派

自宅録音家。1990年千葉県生まれ。Twitter：[@colorgang](#)

2013年8月、フリーメイソン日本グランドロッジ前でシークレット・ライブをおこなった。



総力特集 みみでかちゅう

P. 1 「文化ゆりかご vol. 1」 発行にあたって / P. 1 インタビュー /

P. 28 愛憎みとみと / P. 31 みみでかちゅう覚書 / P. 35 あとがき

発行：宙空一派